

武蔵野東中学校

入学試験 模擬問題

都立型総合

I

表現力

1 文章1と文章2を読み、あとの問題に答えなさい。

文章1

みなさんは自分というものを考えるとき、どこからどこまでの範囲を「自分」だと思いますか？ 「こころ」は自分です。頭で考えるのも自分だから、脳も自分のような気がします。でも手や足は自分でしょうか？ 髪の毛は自分ですか？

実はこの「からだ」に対するとらえ方が、自分という存在を考えるとき、大きなポイントになっています。

④英国の精神医学者で思想家であるR・D・レインという人は、精神の病気を研究した結果、「からだ」が自分のものと感じられるかどうか、精神の病気にひじように関係があると気づきました。

自分の「からだ」に対して、「こんなからだはいらぬ」「こんなからだは嫌いだ」と敵対視している人は、「からだ」が自分の側ではなく、外部の世界の側に存在している、と正しいでしょう。

こうなったときが危険だと、彼は言っています。

人は基本的には「からだ」と「こころ」に統一感があるのが落ちついた状態です。これを「身体化された自己」といいます。

一方、「からだ」から分離した自己があると（これをレインは「身体化されない自己」といっています）、「からだ」は自分ではなく、他の物と同様に自分の外部にあるものになるので、物と同じように見なすようになります。

たとえば「この大きい顔が大きらい。小顔にとりかえたい」とか「この太い足はいらぬ」という具合に。

なぜこんなことになるのかというと、ひとつは人から見られる「からだ」を意識しすぎたからです。

他人を意識した「からだ」のことを「対他者身体」といいますが、その典型がモデルです。彼女たちがひどくやせていて、足が細いのは、服を着て見栄えがよくなるために、そのような「からだ」を求められたからです。

モデルさんはプロですから、ある程度しかたないとしても、普通の子がモデルをまねして無理なダイエットを10代からするのは危険です。

つねに人からどう見られるかを意識した「からだ」を求めていくと、「からだ」はどんどん自分から離れていき、自分のものではなくなってきました。その最たるものが拒食症です。やせた「からだ」に執着して、生命の危機に瀕しても食べることを拒否すると、自分と「からだ」が離れていってしまいます。

自分から「からだ」が分離してしまうため、精神のほうが肥大化して、精神的な問題が起きてくる。精神医学者のレインはそれを指摘したわけです。

西洋には身体と精神を二つに分ける考え方が多かったのですが、日本人は身体と精神をはっきり分けることはあまりしてきませんでした。たとえば「身を引く」といったとき、物理的に「からだ」を引いて

いくだけでなく、「こころ」や精神や立場を引くということも意味しません。

「身を入れる」「身にしみる」「身になってみる」など、いずれも身体を通じた精神のあり方を意味しています。

幕末のころ欧米人おうえいじんが来日して、日本人の穏やかさや公共心の高さに驚いた記述が残っていますが、こうした情緒じょうちゆうの安定ぶりも、心身合一しんしんごういつを伝統としてきた日本の文化とは無関係ではないでしょう。

ところが欧米の考え方が輸入され、「からだ」より精神や理性や思考が重視されるようになると、日本に伝統的にあった心身合一の文化は後退していきます。

また時代が進んで、他人からどう見られるかを意識した「からだ」が求められるようになったため、見栄えのよくない「からだ」は自分にとって許せない存在になってきます。

そのため健康を害してまでやせようとしたり、プチ整形に走る人が増えてきました。

一方で自己から「からだ」がまったく失われていく人もいます。私が最近心配しているのは、インターネットやゲームに没頭ぼつとうしすぎる若い人が増えていることです。

対面状況では、身体と身体が向き合い、お互いの「からだ」が反応し合います。

しかしネットだけをやっていっていると、「からだ」はほとんど必要なくなっていくます。

モニター上ではストリートファイトをやったり、バトルをしたりして、バーチャルでは激しく動いていても、実際には「からだ」を使っているわけではありません。

情報のみでかわるわけですから、だんだん自分のリアルな「からだ」の感覚が薄くなり、バランスを欠いてきます。

精神の病気になる人と同じようなことが起きてくるわけです。私がネット社会の行き過ぎを危惧きぐするのも、こうした理由があるからです。

文章2

「こころ」は今の状態だけを見ていたら、すごく不安定です。「こころ」はいつも天気のようにコロコロ変化します。

今日は何となく湿度しつどが多すぎて気分がふさぐとか、今日は雨降りだから、何となく学校に行きたくないといったように、気分は毎日変化します。でも[®]「こころ」をそんなふうには「天気」にしてしまっただけじゃありません。

本来「こころ」の基本は「地層」のものにもものすごく長く時間をかけて堆積たいせきした安定したものです。みなさんも「こころ」を「天気」ではなく「地層」としてとらえるようにしてください。

私は先日、大学で学生たちに「自分が今まで出会った人の中で、今の自分があるのはこの人のおかげだ、という人たちを思い出して、その人たちのエピソードを書いてください」という宿題を出しました。

すると学生たちから「この宿題をやったおかげで元気になりました」という声がたくさんあがったのです。それはなぜかという、自分が他の人とながついていて、その人たちとの出会いで今の自分ができているという歴史を感じるからだと聞いています。

私の例でいうと、小学校一年生のときは狩野先生かりのというピシッとした女の先生で、二、三年はやさしいお母さんのような杉山先生、四年生は書道の達人でいっしょにサッカーをしてくれた男性の杉山先生、五、六年は熱心で卒業式で泣いて送り出してくれた今村先生というように、六年間の情景がクリアに思い出されます。

あのときはほめられてうれしかった、といった経験がいくつも重なって今の自分にながついているはずです。それがわかれば、今の自分の「こころ」も地層のようにきちんと安定した基礎きその上に立っていると確信できます。

みなさんも自分の地層図を書いてみましょう。

たとえば地層の一番下は幼稚園時代で、近所のお兄さんにかわいがってもらったとか、このとき好きだったのはトミカのミニカーだった、というように楽しかった思い出を書いていきます。

かりに暗い時代があっても、そういう時代はそれなりに、「そういえば予備校にいい先生がいてほめてもらったっけ」などということが思いつきます。一年に一人、自分の歴史に残るひと言を言ってくれた人や、影響を受けた人をあげられれば十分な気がします。

そのつながりが地層的にイメージできると、「こころ」が積み重なっ

ている感じがして今、表層でいろいろなことが起きていても、蓄積ちくせきされた地層のイメージがあるので、それほど動揺どうようせずすみませす。天気のように変化する表層に振り回されずにすむわけです。

地層図が面倒めんどうくさければ、折れ線グラフでもいいでしょう。

生まれたときは、「この世に人として生まれただけでも丸もうけ」だから、一番下からスタートして、しばらく調子がよかつたけれど、中学のときに人生が嫌いやになって、高校受験に失敗したときが最悪だった。そのあと親友ができて、少し上向いたのに、失恋してまたどん底に落ちた——といったように、自分の「こころ」の上がり下がりを書いていきます。

すると自分の「こころ」の動きを天気のような利那せんなてきなものではなく、ある程度の時間の長さをもったものとしてとらえることができます。

(斎藤孝『からだ上手 ころ上手』より)

〔問題1〕

④英国の精神医学者で思想家であるR・D・レインと筆者がそれぞれ考える「身体と精神の問題」が、**文章1**に書かれています。二人が考える問題を、それぞれ二十五字以上三十五字以内で書きなさい。ただし、それぞれ文の終わりには、「問題。」とすること。()、や。などもそれぞれ字数に数えます。

〔問題2〕

⑤「**ここ**」をそんなふうに「**天気**」にしてみました。いけません。とありますが、その理由を四十字以内で書きなさい。ただし、文の終わりは、「から。」とすること。()、や。などもそれぞれ字数に数えます。

〔問題3〕

あなたが考える「身体と心のバランス」について、**文章1**と**文章2**、それぞれの要点にふれ、あなたの考えを四百字以上四百四十字以内で適切にまとめなさい。ただし、次の条件と、左の「**きまり**」にしたがいなさい。

条件1 三段落構成にし、第一段落には、**文章1**と**文章2**、それぞれの要点をまとめること。

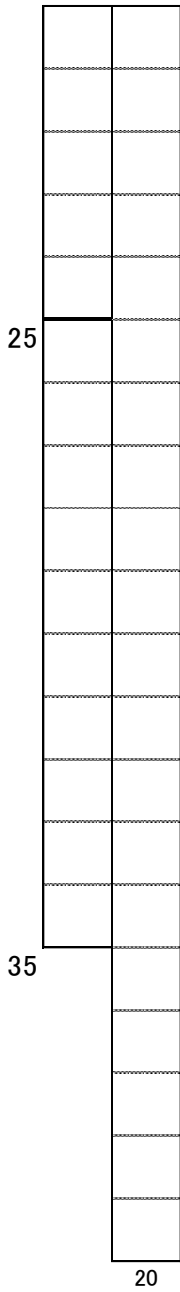
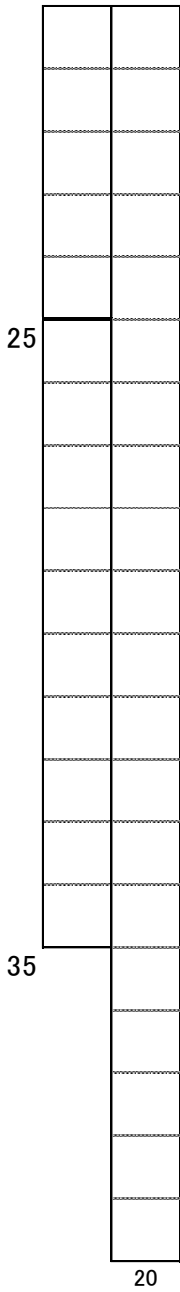
条件2 考えの根拠・理由も書くこと。

〔きまり〕

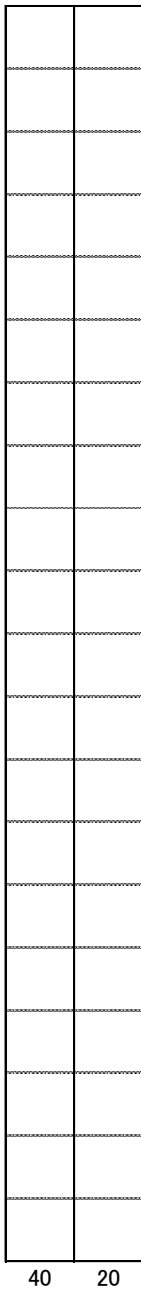
- 題名は書きません。
- 最初の行から書きます。
- 各段落の最初の字は一字下げて書きます。
- 行がえは、段落をかえるときだけとします。

〔問題1〕・R・D・レイン

・筆者



〔問題2〕



〔問題3〕

